

文教委員会資料③

1 所管事務の調査（報告）

(3) 放課後等の子どもの居場所づくり検討中間報告について

資料 放課後等の子どもの居場所づくり検討中間報告について

こども未来局

(令和6年11月14日)



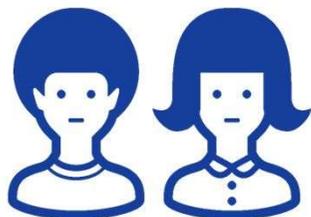
KAWASAKI
SDGs

COLORS
FUTURE!
ACTIONS
KAWASAKI 100th

令和6年1月14日
こども未来局

居たい
行ってみたい
やりたい

放課後等の子どもの居場所づくり検討



中間報告



これまでの経緯

こども施策に関する国・市の動向

子ども達が目指すべき姿やその実現に向けた取組の方向性等について、国・市では以下のような基本方針、計画を示している。（記載内容を一部抜粋）

こども政策の新たな推進体制に関する基本方針（厚生労働省、R3.12）

全てのこどもが、**安全で安心して過ごせる多くの居場所を持ちながら**、様々な学びや、社会で生き抜く力を得るための糧となる多様な体験活動や外遊びの機会に接することができ、**自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well-being）で成長し、社会で活躍していけるようにすることが重要である。**このため、**家庭、学校、職域、地域などの社会のあらゆる分野の全ての人々が、一体的に取り組んでいく。**

第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン(R4.3)

子ども・若者は成長する過程で、**自尊感情や自己肯定感を大切にすることで豊かな心を育み、積極的に社会に関わることで成長を続け、やがては社会で自立した大人へと成長していきます。**

本市の社会状況や子どもを取り巻く**家庭・地域の環境が変化**する中、子どもが多世代との交流の中で**多様な価値観に触れる機会が失われており、子どもを孤立から守り、健やかに育てるための居場所がより一層必要**となっています。

家庭・学校・地域・行政などが連携・協力して、子ども・若者や子育てをする家庭に寄り添いながら、子どもの健やかな成長を見守り、地域社会全体で支える仕組みづくりを進めます。

こども施策に関する国・市の動向

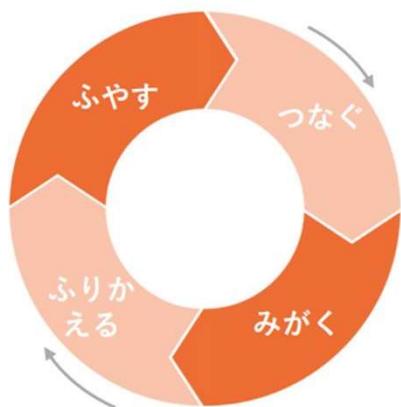
「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」に基づき、国は**居場所づくりに関する一定の考え方を**、「こどもの居場所づくりに関する指針」として提示

こどもの居場所づくりに関する指針（こども家庭庁、R5.12）

各視点に共通する事項

- ① **こどもの声を聴き、こどもの視点に立ち、こどもとともにつくる居場所**
 - － こども・若者の声を聴き、「居たい」「行きたい」「やってみたい」というこども・若者の視点に立ち、こども・若者とともに居場所づくりを進めることが重要
- ② **こどもの権利の擁護**
 - － こども基本法等を踏まえ、こどもの権利について理解し守っていくとともに、こども自身がその権利について学ぶ機会を設けることも重要
- ③ **官民の連携・協働**
 - － 居場所の性格や機能に応じて、官民が連携・協働して取り組むことが必要

こどもの居場所づくりにおける 4つの基本的な視点



これらの視点に順序や優先順位はなく、相互に関連し、また循環的に作用するものである。

ふやす

～多様なこどもの居場所がつくられる～

- ・地域の既に居場所になっている資源やこども・若者が居場所を持っているか等実態を把握する。
- ・学校や児童館、公民館など既存の地域資源を柔軟に活用して居場所づくりを進める。
- ・新たに居場所づくりを始めたい人を、多面的にサポートする。
- ・持続可能な居場所づくりが進められるよう、ソフトとハードの両面で支える。
- ・災害時においてこども・若者が居場所を持てるよう配慮する。

つながぐ

～こどもが居場所につながる～

- ・居場所に関する情報をまとめ、可視化し、こども・若者自身が見つけられ、選びやすくする。
- ・こども・若者の興味に即した居場所づくりにするなど、こども・若者が利用しやすい工夫を施す。
- ・自分で居場所を見つけにくいこども・若者も、幅広い手段を講じ、居場所につながるようにする。

みがく

～こどもにとって、より良い居場所となる～

- ・こども・若者の心身の安全が確保され、安心して過ごせる居場所づくりを進める。
- ・こども・若者が居場所づくりに参画し、こども・若者とともに居場所づくりを進める。
- ・どのように過ごし、誰と過ごすかを意識した居場所づくりを進める。
- ・居場所同士や関係機関が対話し、連携・協働した地域全体の居場所づくりを進める。
- ・環境の変化によるこども・若者のニーズに対応した居場所づくりを進める。

ふりかえる

～こどもの居場所づくりを検証する～

- ・居場所づくりの検証の必要性は高いが、効果的な指標は定まっておらず、今後の重要な検討課題である。こどもの居場所の多様性と創造性を担保しつつ、理念を踏まえた指標の検討が必要である。

3

※「こどもの居場所づくりに関する指針（概要版）」（こども家庭庁作成）から抜粋

こども施策に関する国・市の動向

子どもにとって望ましい姿（国・市の動向から）

自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well-being）で成長し、社会で活躍

積極的に社会に関わることで成長を続け、やがては社会で自立した大人へと成長

具体的な内容は次ページ以降で説明

子ども達をとりまく状況・子ども達自身の状況

社会状況や子どもを取り巻く家庭・地域の環境が変化する中、
多世代との交流の中で多様な価値観に触れる機会が失われている

子どもにとって望ましい姿を実現するため、
子どもを孤立・孤独から守り、健やかに育てるための居場所がより一層必要

家庭・学校・地域・行政などが連携・協力、地域社会全体で取り組む



子ども達をとりまく 現状と課題

子ども達自身の状況①

小・中学生の自己有用感

本市の小・中学生(小4～中3)の自己有用感を示す数値(※)は、90%以上と比較的高い水準にあるが、**学年が上がるにつれて低下する傾向**

(※)「人の役に立つ人間になりたいと思う」の設問に対し、「とてもあてはまる」と「まあまああてはまる」と回答した割合の合計値

人の役に立つ人間になりたいと思う(自己有用感)



※出典：令和5年度 川崎市学習状況調査 報告

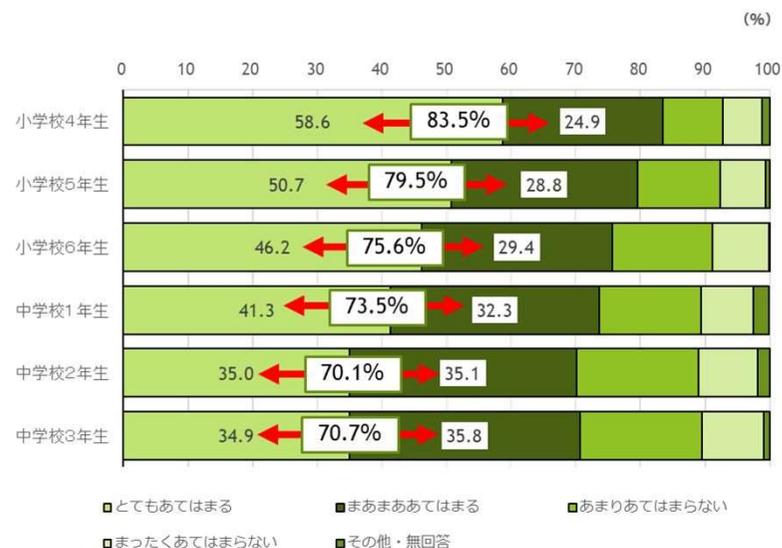
小・中学生の自己肯定感

本市の小・中学生(小4～中3)の自己肯定感を示す数値(※)は、**学年が上がるにつれて低下する傾向**

○自己有用感と比較すると、各学年とも低い数値

(※)「自分にはよいところがあると思う」の設問に対し、「とてもあてはまる」と「まあまああてはまる」の合計値

自分にはよいところがあると思う(自己肯定感)



※出典：令和5年度 川崎市学習状況調査 報告

学年が上がるにつれ、自己有用感・自己肯定感とも低下する傾向
また、自己有用感が高いものの、自己肯定感を持っていない小・中学生が比較的多い

子ども達自身の状況②

小・中学生の将来への希望感

本市の小・中学生(小4～中3)の将来への希望感を示す数値(※)は、**学年が上がるにつれて低下する傾向**

(※)「将来の夢や目標を持っている」の設問に対し、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と回答した割合の合計値

将来の夢や目標を持っている

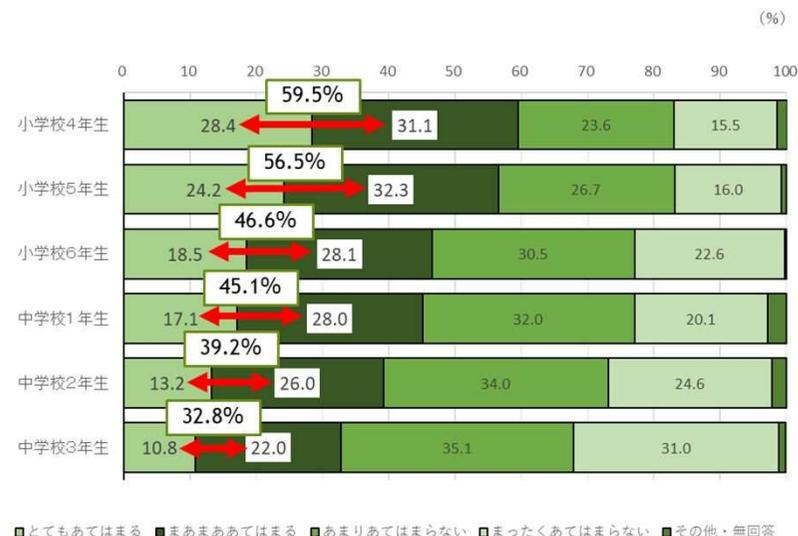


※出典：令和5年度 川崎市学習状況調査 報告

小・中学生の社会参加

本市の小・中学生(小4～中3)の地域の行事への参加については、**学年が上がるにつれて減少する傾向**

今住んでいる地域の行事に参加している(社会参加)



※出典：令和5年度 川崎市学習状況調査 報告

**学年が上がるにつれ、将来への希望感は低下・社会参加は減少する傾向
また、人の役に立ちたいとは思っているものの、社会参加が出来ていない状況**

子ども達自身の状況③

不登校児童・生徒数の増加

市立小・中学校における不登校児童・生徒数は、平成28（2016）年から令和元（2019）年にかけて、**小学生では378人から700人に、中学生では1,116人から1,389人に増加**

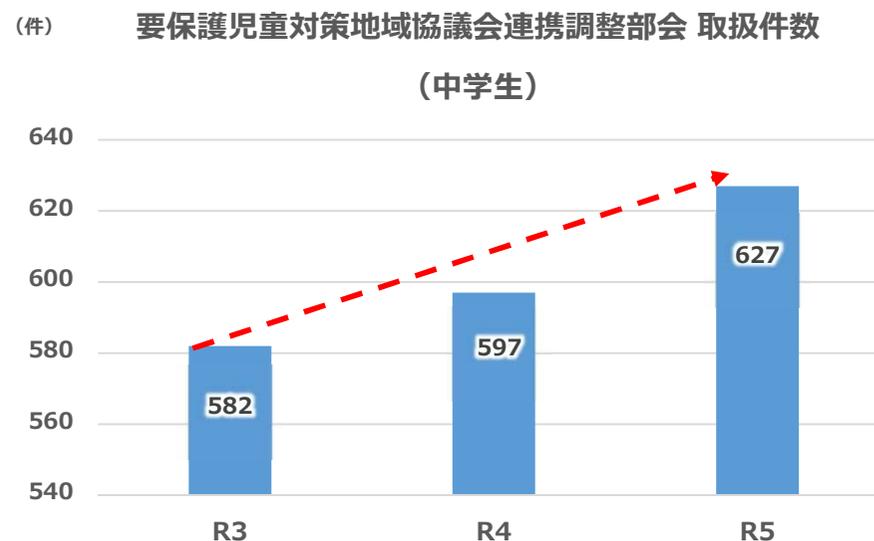


※長期欠席=病欠+不登校+その他
 ※不登校出現率は1,000人あたりの数（不登校者数÷全児童・生徒数×1,000）
 資料：令和元（2019）年度川崎市立小・中学校における児童生徒の問題行動等の状況調査結果

※出典：第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン

要対協取扱件数の増加

本市の中学生における要保護児童対策地域協議会における取扱児童の件数は令和3（2021）年から令和5（2023）年では**582件から627件に増加**



※出典：川崎市こども未来局児童家庭支援・虐待対策室調べ

不登校児童・生徒数、要対協取扱件数は増加傾向にあり、課題を有する子どもが増加

その背景として、子ども達の孤立、孤独状態があると考えられる

子ども達をとりまく状況①

核家族化の進行

平成2（1990）年から30年間の核家族世帯（夫婦のみ、夫婦と子、男親と子、女親と子）の変化をみると、平成2（1990）年の約26万世帯から令和2（2020）年には約37万世帯に増加



資料：総務省 国勢調査

※出典：第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン

共働き世帯の増加

本市の18歳未満の子どもがいる世帯のうち、親が共に働いている世帯の構成比は、平成12（2000）年の37.3%から、平成27（2015）年には51.4%に増加



資料：総務省 国勢調査

※出典：第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン

核家族化の進行、共働き世帯の増加により、子育てに不安・負担を感じる家庭も増加しているものと考えられる

子ども達をとりまく状況②

近所の人との交流の希薄化

この1か月間での近所の人との交流の程度は、「玄関先など、出先で会った時に挨拶をした」が73.4%で最も高く、一方、7.7%は「まったく付き合いがない」と回答しており、一部の人は近所付き合いの程度が低い状況（川崎市子ども・若者調査（令和2（2020）年）より）

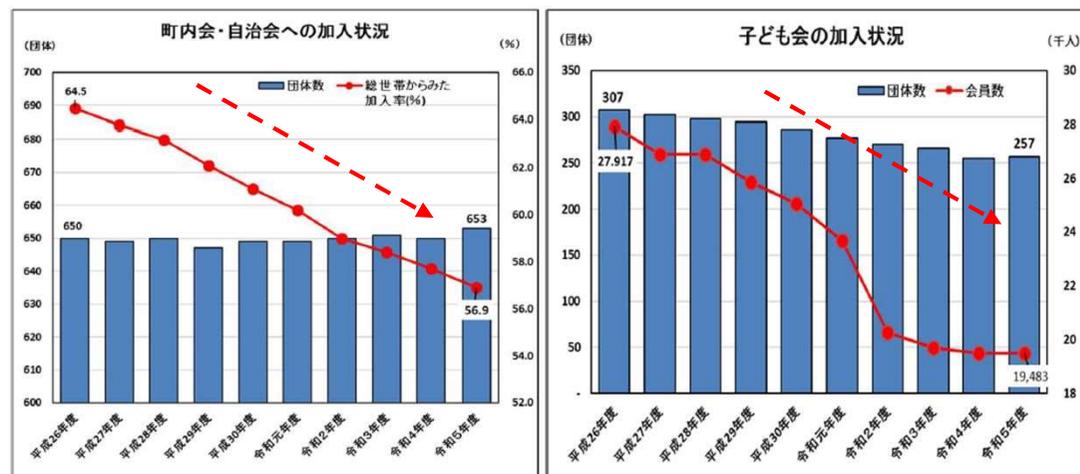


※複数回答
資料：川崎市子ども・若者調査（令和2（2020）年）

※出典：第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン

住民組織への加入率の低下

川崎市の住民組織への加入状況は、町内会・自治会の団体数は横ばいであるものの、総世帯からみた加入率は、10年間に7.6%下がっており、子ども会の団体・会員数も減少傾向



※出典：第32期協議題意見具申書

地域でのつながりの希薄化により、子どもが地域コミュニティで育つことが困難な状況が生じているものと考えられる



必要となる子どもの居場所

Well-beingを目指すための居場所

子どもにとって望ましい姿（国・市の動向から）

自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well-being）で成長し、社会で活躍

積極的に社会に関わることで成長を続け、やがては社会で自立した大人へと成長

子ども達自身の状況

学年が上がるにつれ、自己有用感・自己肯定感・将来への希望感が低下

自己有用感が高いが、自己肯定感を持ってない・社会参加が出来ない小・中学生が多数

不登校児童・生徒数、要対協取扱件数の増加⇒課題を有する子どもの増加

子ども達を取り巻く状況

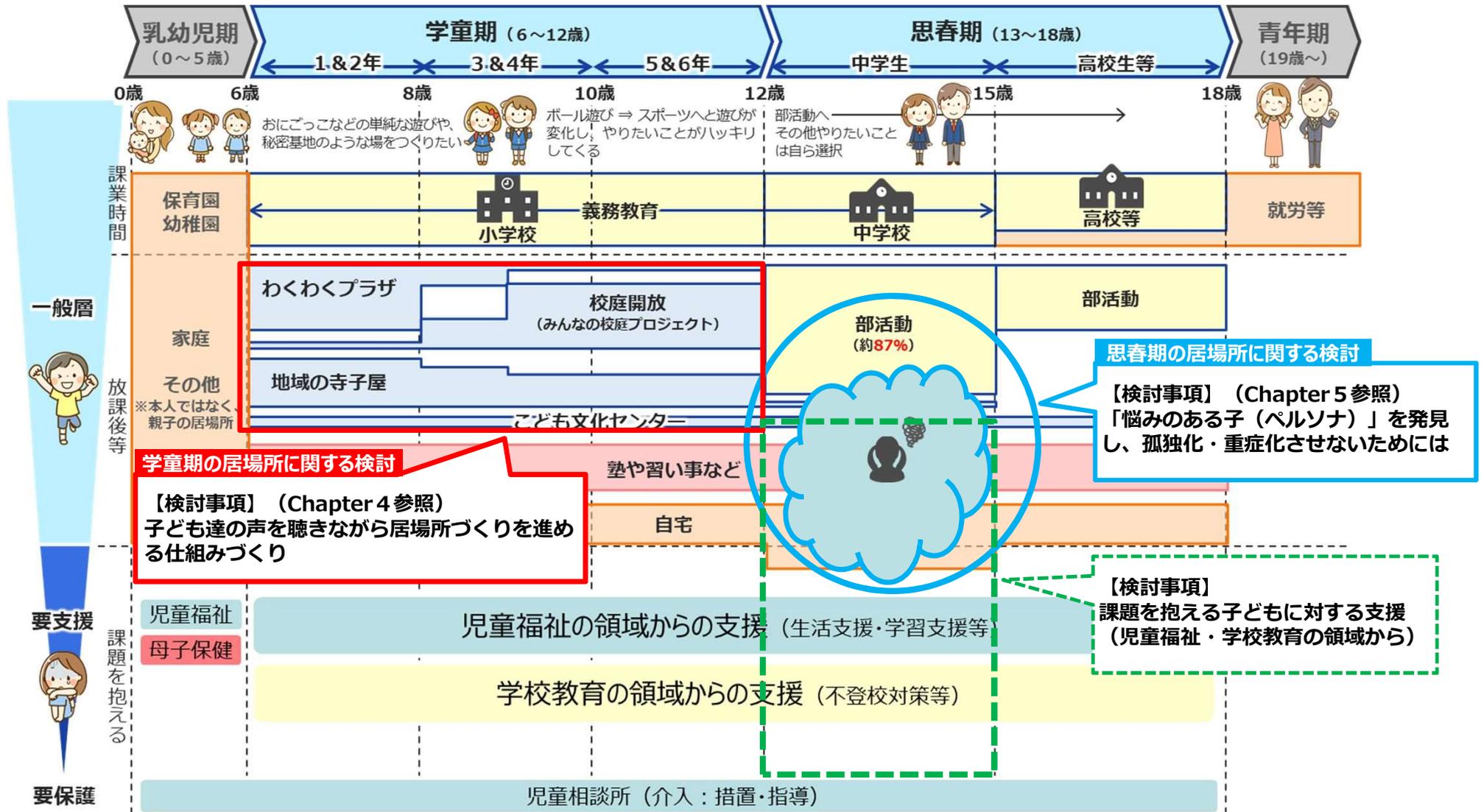
核家族化の進行、共働き世帯の増加⇒子育てに不安・負担を感じる家庭の増加

地域でのつながりの希薄化⇒子どもが地域コミュニティで育つことが困難な状況

子どもにとって望ましい姿を実現するため、
子どもを孤立・孤独から守り、健やかに育てるための居場所がより一層必要

子どもの成長に応じた居場所

子ども達の発達段階（学童期・思春期）に応じて必要となる居場所は異なると考えられることから、子どもの成長に応じた居場所づくりに向け、以下の検討事項を設定し庁内で検討





これまでの検討状況①

～学童期の居場所に関する検討～

子ども達の声を取りながら居場所づくりを進める仕組みづくり

「子どもの視点に立ち、子どもの声を取りながら居場所づくりを進めていく」取組を全市的に進めていくために、以下の3 Stepを基に、居場所づくり検討を行ってきた。



子どもへのアンケート&意見交換

1
First step

小学生へのアンケート結果から



放課後は家にいるけど、友だちと遊びたい!

- ほとんどの子どもたちは、放課後、自宅で過ごしている一方で、放課後に“友だちと過ごしたい”と思っている。



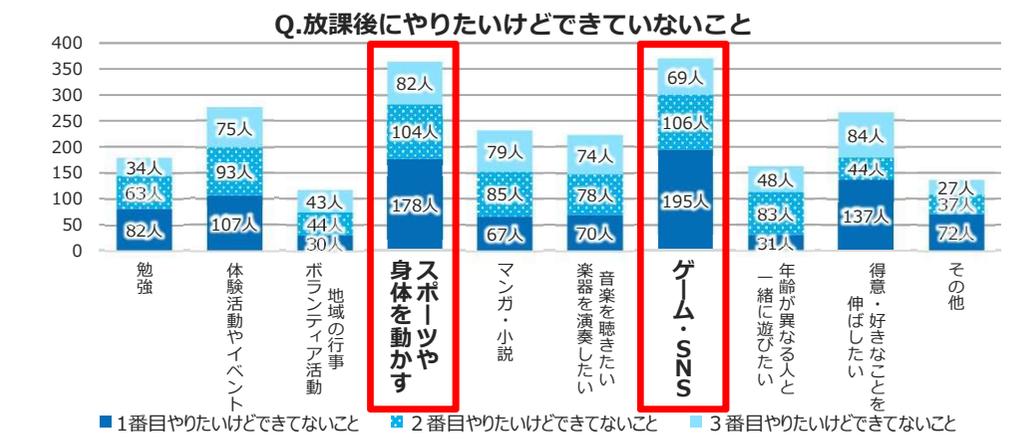
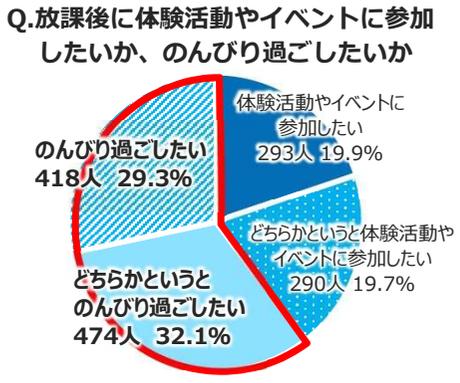
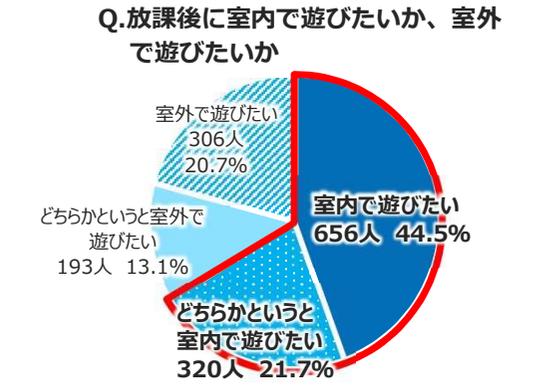
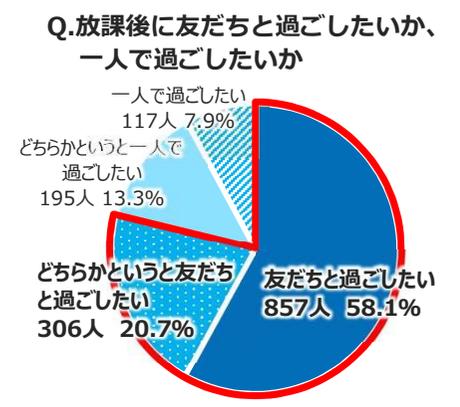
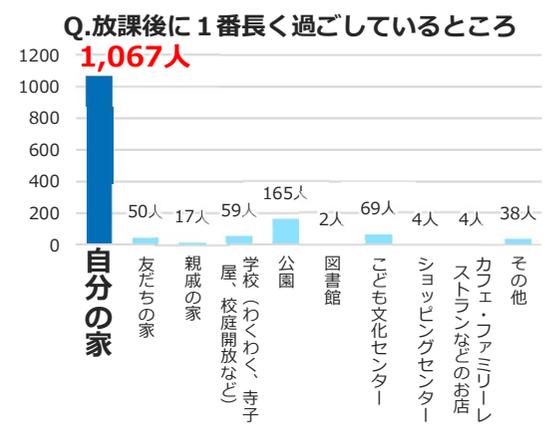
室内で過ごしたい! のんびり過ごしたい!

- “友だちと過ごしたい”ほか、放課後は、“室内で過ごしたい”、“のんびり過ごしたい”というニーズが高い。



身体を動かしたい! ゲームしたい!

- 放課後にやりたいけどできていないことでは、“スポーツや身体を動かすこと”、“ゲーム・SNS”の割合が高い。



子どもへのアンケート&意見交換

1
First step

子どもたちとの意見交換から



公園やこ文は、ルールの変更が求められている。

- 運動したり、のんびりできる場所として、公園やこども文化センターがあるが、“飲食禁止”や“周りの大人の目が厳しい”など、**あまりやりたいことができない**という声が多かった。



友だちとのんびりしたい！体育館で運動したい！

- “友だちとのんびり過ごしたい”**のニーズが高く、やりたいことは“ゲーム”や“自由におしゃべり”、“一緒に勉強”など
- “体育館”**で運動したいという声も多く、やりたいことは“ドッジボール”、“バスケットボール”、“バドミントン”など



寺子屋おおがやと



東柿生小学校



寺子屋おおがやと



幸市民館

“のんびり過ごしたい！”&“運動したい！身体を動かしたい！”
という子どもたちの意見を踏まえ、お試しDAY(Step2)の実施



お試しDAYの実施

2 Second step

東柿生小での実施結果から



実施日の参加人数

場所&日	11/28(火)	30(木)
校庭	25人	12人
体育館	50人	65人
ミーティング ルーム	12人	10人

3~6年の児童数
275人



実施結果から見てきたこと

- 校庭にバスケットゴール未設置のため、体育館は2日間とも混雑
- 2階のキャットウォーク等にボールが頻繁に乗るため、常に職員が対応する状況
⇒一定程度の大人の見守りが必要
- ミーティングルームでは、1人で来て、勉強する子どももいた。

●校庭



サッカーやドッジボール、鉄棒などで遊んでいた。



●体育館



ほとんどの子どもたちがバスケットボールを楽しんでいた。



●ミーティングルーム



友だちとおしゃべりしたり、工作したり、勉強したりしていた。



お試しDAYの実施

2
Second step

柿生 & 王禅寺こ文での実施結果から



実施日の参加人数

場所&日	11/27(月)	28(火)	29(水)	30(木)	12/1(金)
柿生こ文	7人	30人	30人	12人	20人
王禅寺こ文	3人	11人	28人	4人	2人

※ 両こども文化センターとも、学習室のみの利用人数
 ※ 11/28(火)、11/30(木)は校庭 & 体育館等の開放日

普段の利用人数
3~5人程度



実施結果から見てきたこと

- 王禅寺こ文に行く東柿生小の子どもはほぼいなか
 った一方で、学校での開放後、柿生こ文に行く
 子どもは一定数いた。

学区内等

⇒ **子どもたちは決められた行動範囲で遊ぶ!**

- 新規来館者ではなく、既存ユーザーがほとんど
 だったが、既存ユーザーの来館は多く、満員状
 態だった。

⇒ **行ったことがないとイメージしづらい?**

● 柿生こ文

変更前



● 王禅寺こ文



変更後



Wi-Fiや大きなモニターがあって最高!
友だちと集まってゲームしやすい!

子どもたちの声

これからもWi-Fiを
使えるようにして~



低いテーブルだと、前より友だちと
おしゃべりや遊びやすくなった!

Chapter /
5

これまでの検討状況② ～思春期の居場所に関する検討～ (係長級ワークショップの実施)

【メンバー】

指導主事（教員）、心理職、事業所管事務職等

【ファシリテーター】

教育相談センター室長

幸区地域支援課課長

中学生へのアンケート結果から



放課後は、余暇がほとんどない！

- ほとんどの子どもが平日は部活や習い事、塾等で余暇がない状況にある。
- ほとんどの子どもが、のんびり過ごしたいと考えており、自宅で過ごしている。



やりたいことが多様化している。

- やりたいことが分散しており、やりたいことや興味が明確になってきている。

..ほとんどの子は..

★放課後は忙しい（のんびりしたい）

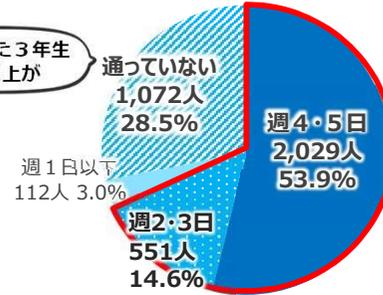
★自由に過ごしたい！

..そんな忙しい学校生活の中で..

◆様々なボリューム・グラデーションの「悩み」を持っているのでは...

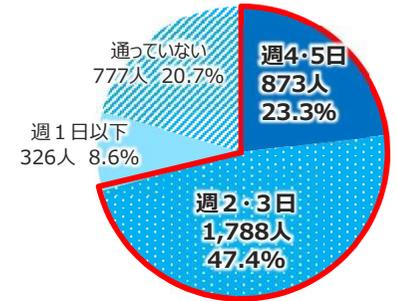


Q.平日に部活に何日通っているか。

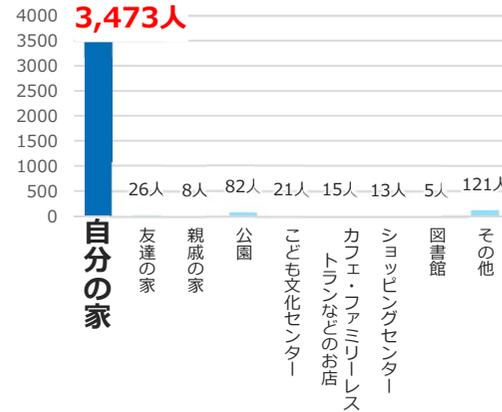


うち引退した3年生が7割以上

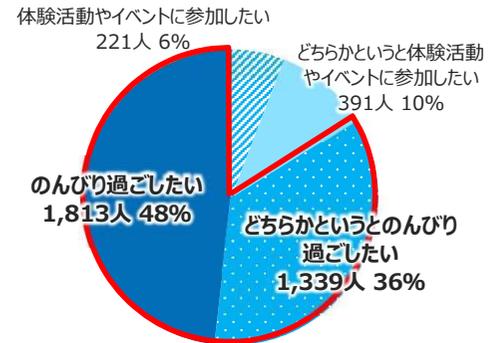
Q.平日に習い事や塾に何日通っているか。



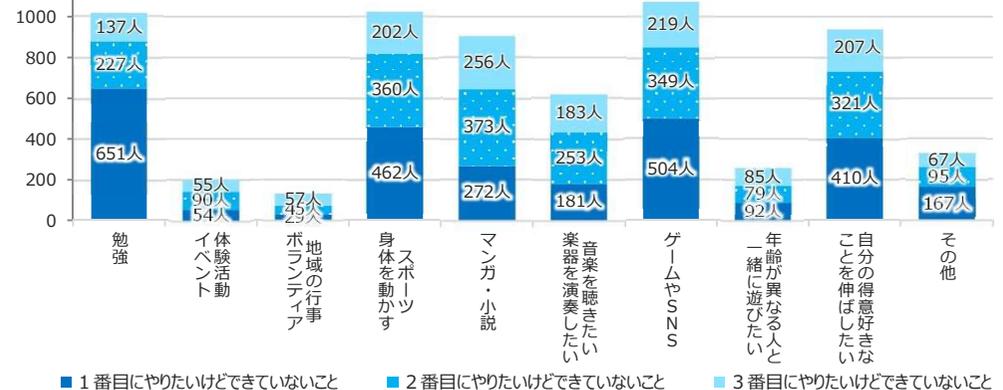
Q.放課後に1番長く過ごしているところ



Q.放課後に体験活動やイベントに参加したいか、のんびり過ごしたいか



Q.放課後にやりたいけどできていないこと



思春期の子ども達に関する仮説

WSで、誰もが経験する思春期特有の『悩み』が積み重なることのリスクを議論
どのような居場所があれば、孤独状態を取り除き、重症化を防げるかを検討

⇒ 『孤独』な状態で『悩み』が積み重なる…

⇒ 『悩み』が徐々に重くのしかかる…

⇒ 気力・コミュニケーション能力が
どんどん失われる状況…



専門職がケアしても支援が長期化するほど
に重症化する『可能性のある子ども』

パターン1) 自宅の部屋から出られない…

パターン2) 昼夜問わず繁華街を徘徊…



『孤独』

ペルソナ
(悩みのある子)

原因不明の体調不良…

生活リズムの乱れ…

親に相談できない…

先生に相談できない…

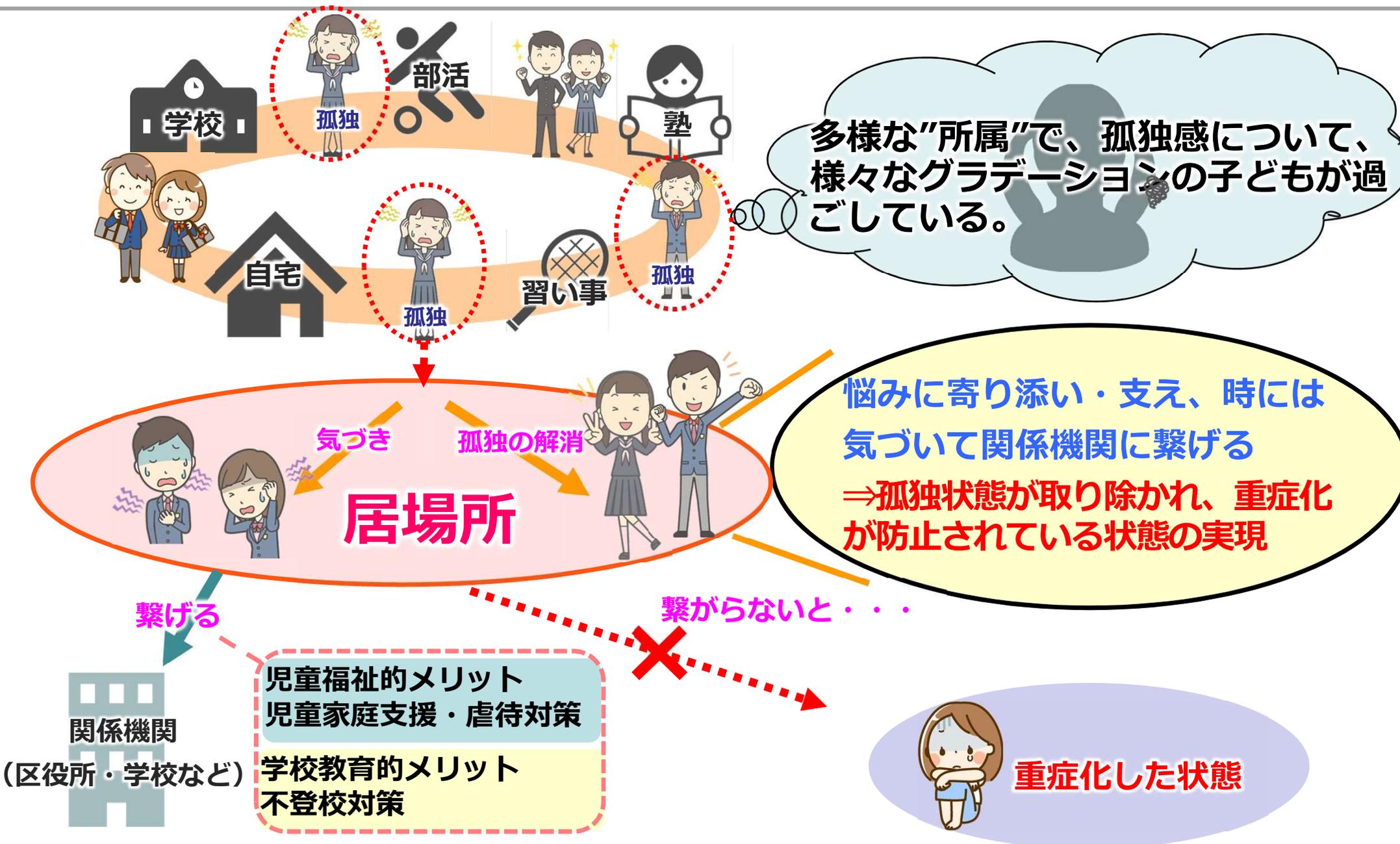
友達ができない…

クラブ活動や部活になじめない…

授業についていけない…

思春期特有の『悩み』

思春期の居場所づくり イメージ図



WSのまとめ

令和6年度に実施したWSでの議論から、思春期の居場所について以下のとおりまとめた。

対象となる子どもの考え方

全ての子どもが対象であり、かつ、誰でもが経験しうる思春期特有の悩みや不安が、孤独な状況で悪化してしまうことを想定
→誰もが、何かのきっかけでなりうるため定量化・定数化できない。

居場所の目的

日常的に交流できる場で、**気軽な声かけなど適度な距離感で関わり・一緒に考えてくれる地域の大人**がいたり、**支援が必要となる子どもを発見して関係機関等につなげたり**することで、**子どもを孤独化させない、重症化防止**することができる場所

必要と考えられる“機能”

子ども達が自由に気がねなく来られることが必要であり、決まった目的はなく、誰もが利用できる、自分のやりたいことができる、行ってみたい場所

思春期の居場所づくりに向け、今後、具体的な取組を検討



居場所づくりに関する方向性の 策定に向けて

～方向性の策定趣旨～

「放課後等の子どもの居場所に関する今後の方向性」(以下「方向性」という。)策定の趣旨

少子化、核家族化、地域との関係の希薄化、共働き世帯の増加、不登校・いじめ・非行等の困難を抱える子どもの増加など、**子どもたちを取り巻く環境が激しく変化**

放課後、子ども達が安心して過ごすことができる居場所づくりを全市的に進めるため、**居場所づくりに関する基本的な考え方や、本市の取組の方向性等を具体化**

方向性の位置づけ

川崎市総合計画

総合計画の分野別計画

第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン

＜施策の方向性Ⅰ 子どもが地域ですこやかに育つことができる環境の充実＞
本市の社会状況や子どもを取り巻く家庭・地域の環境が変化中、子どもが多世代との交流の中で多様な価値観に触れる機会が失われており、**子どもを孤立から守り、健やかに育てるための居場所**がより一層必要となっています。

具体的な内容

放課後等の子どもの居場所に関する今後の方向性

○方向性は、「**第2期川崎市子ども・若者の未来応援プラン**」の、**居場所に関する具体的な内容**を示すものとして位置づけ

○国の「**こどもの居場所づくりに関する指針**」の**理念を共有**した上で策定

←理念の共有

(国) こどもの居場所づくりに関する指針

～方向性の策定趣旨～

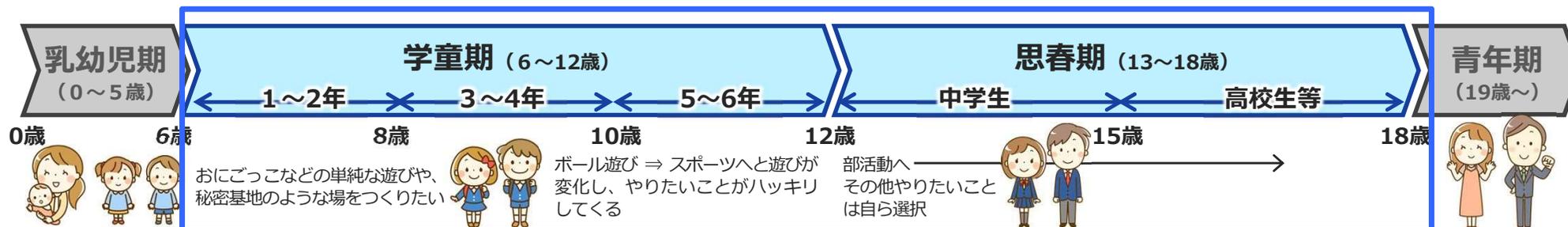
方向性の対象

全ての子どもに対し、その置かれている環境等にかかわらず、**居場所づくりが必要**

居場所づくりにより形成される場が、子どもにとっての居場所となるためには、**子どもの声を聴きながら、子どもと一緒に居場所づくりを進める**ことが重要

本方向性では、こうした居場所づくりの推進を目的とし、
就労等を行う青年期(19歳～)以前の子どもである、
学童期(6～12歳)、思春期(13～18歳)の子どもの居場所づくりを対象

合わせて、**課題を抱える子ども**については、
児童福祉・学校教育の領域からの公的な支援等を実施



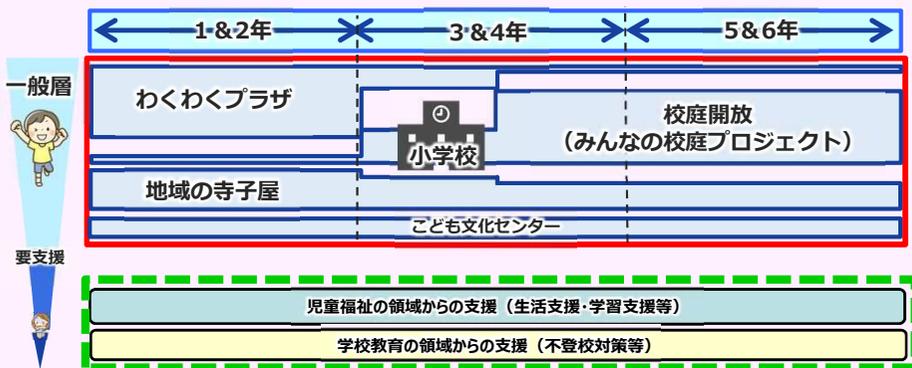
～居場所づくりに関する基本的な考え方～

これまでの検討から、子どもの中でも、**年齢（学童期／思春期）**により必要となる居場所の機能・目的（目指すもの）は異なるものと考えられる

【基本的な考え方】 年齢に応じた機能・目的を有する居場所づくり

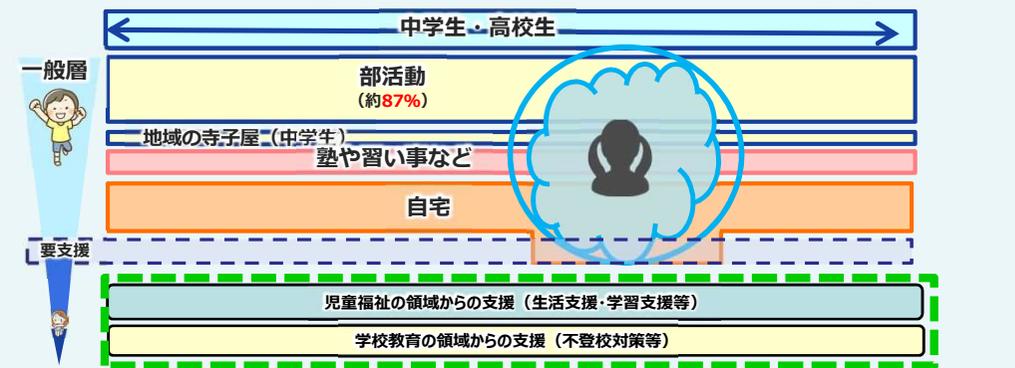
○学童期の子ども

- ・自分のやりたいことができる、居たい、行ってみたい場所
- ・小学校における居場所づくり



○思春期の子ども

- ・決まった目的はなく、誰もが利用できる場所
- ・自分のやりたいことができる、居たい、行ってみたい場所
- ・子どもを孤独化させない、重症化防止することができる場所

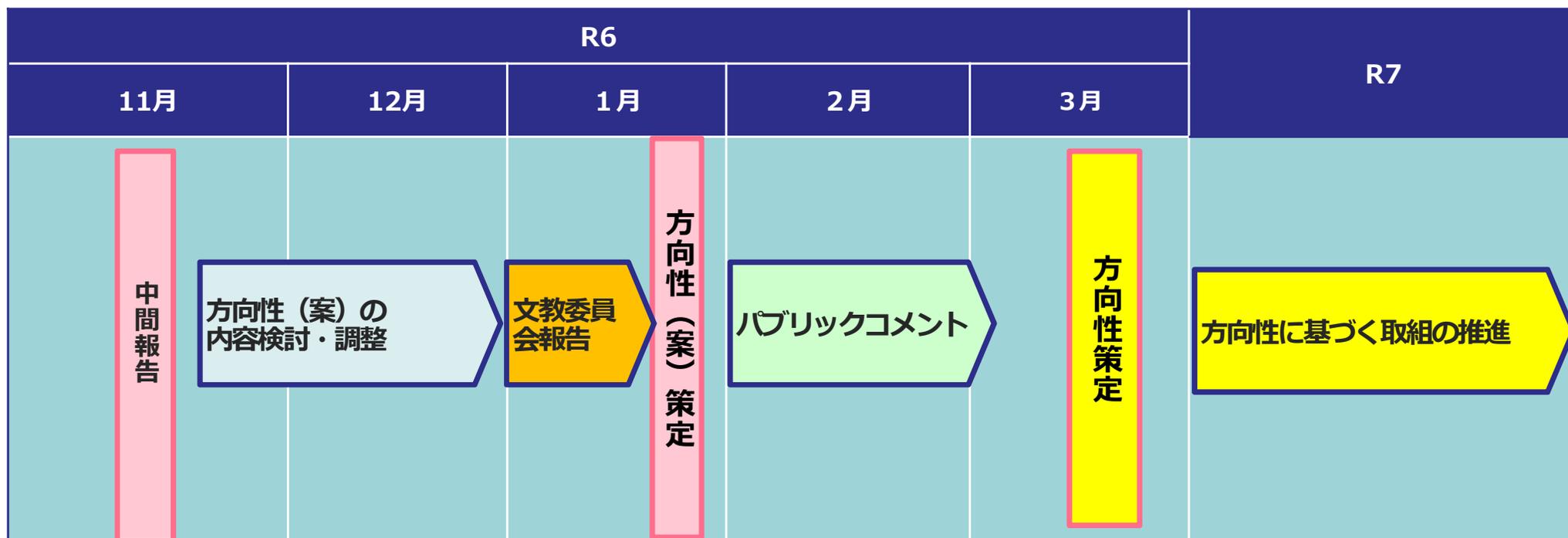


課題を抱える子ども達に対し、**児童福祉・学校教育の領域からの支援が必要**

【基本的な考え方】各施策のシームレスな連携(各局による一体的な取組)により、**子どもの状況に応じた支援を実施**

～今後のスケジュール～

これまでの検討内容について、「放課後等の子どもの居場所に関する今後の方向性」（以下「方向性」という。）として案をとりまとめ、パブリックコメントを実施した上で、令和7年3月を目途に成案を策定する。



【参考】令和6年度WSでの意見

令和6年度 第1回WSでの意見

Q. 『悩み』を抱える子ども(雲の層の子ども)をどのように把握するか。

【ワークショップでの主な意見】

● どのように把握するかについて

- ・ ある日突然雲の層に入っていることや、幼少期からの環境の積み重ねで雲の層に入っている場合もある。
- ・ 全数把握しているのは小学校だが、誰もが雲の層になりうるため教員が把握するのは難しい。
- ・ 子どもたちの状況がそれぞれ異なるので定量化・定数化することは難しい。

Q. 気力がない、コミュニケーション能力が低い原因として、
「孤独」状態が考えられるかどうか。 また、その他、考えられる原因はあるか。

【ワークショップでWSの主な意見】

● 気力がない、コミュニケーション能力が乏しい原因として「孤独」状態が考えられるかどうか。

- ・ 「コミュニケーション能力が低い」ことは「孤独」に結びついていると考えられる。
- ・ 「気力がない」という理由で「孤独」になってはいないかもしれない。
- ・ 「気力がない」、「コミュニケーション能力の低い」、「孤独」というのは相互作用的に負のスパイラルになっていることもあり得る。

● その他、考えられる原因

- ・ 孤独の要因は無数にあるが、環境の変化は誰にとっても大きなストレスなので原因となる可能性がある。

令和6年度 第1回WSでの意見

Q. 『悩み』を抱える子ども（雲の層）が『課題』がある子ども（要支援層）にならないために必要な居場所はどのような場所か。

【ワークショップでの主な意見】

● 【対象者】

- ・ 誰が来ても良い開かれた居場所

● 【ソフト面】

- ・ 定型的に決められた事業を実施するのではなく、その時々課題に対して柔軟に事業を実施できる。
- ・ 悩み事について、気軽に相談できる大人がいる。（あまり干渉はしてこない。）
- ・ 支援が必要な子どもを専門機関につなげることができる大人がいる。
- ・ 環境の変化のストレスの緩衝材となる、小学生から中学生になっても使える連続性のある場所
- ・ 居場所が課題を抱えている子どもの選択肢となるためには、家から来てもらえるための工夫・動機付けが必要。
（ex.ダサくない名前、集中して勉強ができる、食べ物がある、一人で過ごせる、みんなでのんびり過ごせる等）
- ・ 家の延長のようにのんびりと過ごせる場所だと良い。

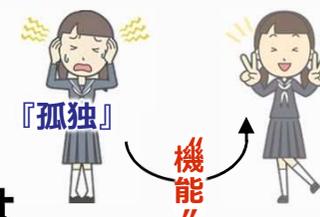
● 【ハード面】

- ・ 冷暖房があって、Wi-Fiが使える箱があればよい。（コミュニティスペースのような場所）
- ・ 目的や子どもの特性に応じた部屋があると良い。（大人数で集まれる場所、ひとりで勉強できる場所）

令和6年度 第2回WSでの意見

意見交換内容

- ① 「なぜ『**孤独**』な状態が、引きこもりや不登校等の重症化につながるのか」
- ② 「悩みに“寄り添い・支え、時には気づいて”関係機関に繋げる**“機能”**とは



① 『**孤独**』について

- ・社会的に孤立していても大丈夫な人はいるが、所属があっても孤独な状態は重症化につながる。
- ・孤独とは主観的で専門機関につながる前の状態。
- ・狭い世界で視野が狭くなり、重症化につながる。
- ・自分のエネルギーが下がり、助けを求めることもなくなり、支援の手がなくなる。
- ・成長過程の段階で孤独感が積み重なり、それが中学生で顕在化する。

② **“機能”**について

- ・あまり、子どもに干渉しすぎない大学生ぐらいの大人（専門職ではない。）
- ・相談を受けたときに、答えをだすのではなく、ナナメの関係で一緒に考えてくれる。（傾聴的）
- ・普段の会話などから子どもの変化に気づき、悩みを打ち明けてくれる信頼関係があること。
- ・学校や自宅ではできない過ごし方ができる場所であること。
- ・一人でいることも受け入れてくれる雰囲気があること。
- ・ハードルが低く目的がなくともこれるが、やりたいことはできる場所
- ・相談できる場所ということではなく、誰もが利用できる場所

